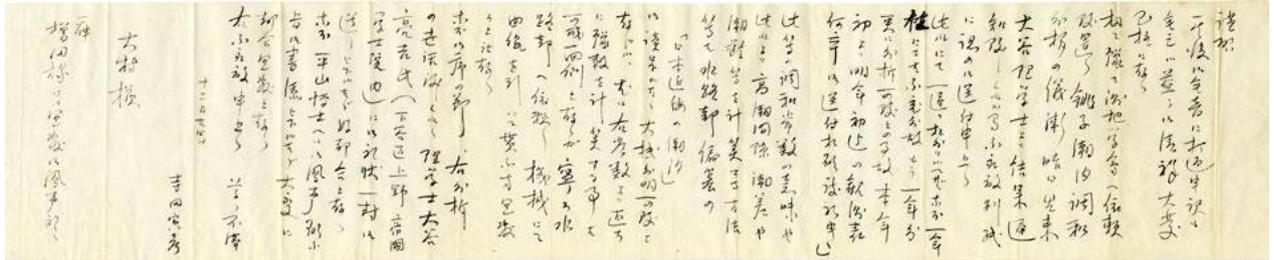


# 寺田寅彦の全集未収録書簡

四宮義正

寺田寅彦の全集未収録と思われる毛筆の書簡を見る機会を得たので紹介する。なお封筒は失われていた。



上の写真のように巻紙に毛筆でしたためられている。紙の幅18センチ、途中で貼り継いで長さ約90センチである。和紙には富士山を含む山脈と松林のある海岸、帆掛け船の透かしが入っている。また三行九文字が流麗に透けているが読めなかった。寅彦の筆跡は細い筆で伸びやかに書かれているが、候文、変体仮名使用であり簡単には読めなかった。判読した限りで活字にしてみた。

謹啓

其後御無音に打過申訳も無之候 益々御清祥大慶至極に存候 扱て豫て測地学会へ依頼致置候銚子潮汐調和分析の儀漸昨日出来大谷理学士より結果通知致しくれ候間不取敢別紙に認め御送付申上候

此れにて一通り相分り候へ共なほ一年惟にては不充分故もう一年分更に分析可致との事故本年初より明年初迄の観測表何卒御送付相願度祈申候

此等の調和常数の意味や此れより高潮間隙潮差や潮齡等を計算する方法等は水路部編纂の「日本近海の潮汐」御読被下候はゞ大抵分明可致と存じ候、尤も右常数より直ちに豫数を計算する事は可成面倒と存候が寧ろ水路部へ依頼し機械にて曲線を引いて貰ふ方宜敷うと被存候

なほ御序の節、右分析の世話致しくれ候理学士大谷亮吉氏（下谷區上野帝國学士院内）に御礼状一封御送し被下候はゞ好都合と存候

なほ平山博士へも御鳳声願ふ旨御書添被下候はゞ大変に都合宜敷と存候

右不取敢申上候

草々不備

十二月廿四日

寺田寅彦

大村様

二伸

増田様にも宜敷御鳳声祈候

これでは読み難いので分りやすいように書き改めてみる。

謹啓

その後ご無音に打ち過ぎ申し訳もこれなくそうろう 益々ご清祥大慶至極にぞんじそうろう さてかねて測地学会へ依頼致し置きそうろう銚子潮汐調和分析の儀ようやく昨日でき大谷理学士より結果通知致しくれそうろうあいだ とりあえず別紙に認めご送付申し上げそうろう

これにて一通りあい分りそうらえどもなお一年これにては不充分ゆえもう一年分更に分析致すべくとの事ゆえ本年はじめより明年はじめまで観測表何卒ご送付あい願いたく祈りもうしそうろう これらの調和常数の意味やこれより高潮間隙潮差や潮齡等を計算する方法等は水路部編纂の「日本近海の潮汐」お読みくだされそうらはば大抵分明致すべくとぞんじそうろう もっとも右常数よりただちに予数を計算する事はかなり面倒とぞんじそうろうがむしろ水路部へ依頼し機械にて曲線を引いてもらう方よろしかろうとあられそうろう

なお おついでの際、右分析の世話致しくれそうろう理学士大谷亮吉氏（下谷区上野帝国学士院内）にお礼状一封お送りくだされそうらはば好都合とぞんじそうろう

なお平山博士へもごほうせい願う旨お書き添えくだされそうらはば大変に都合宜しくとぞんじそうろう

右とりあえず申し上げそうろう

草々不備

十二月二十四日

寺田寅彦

大村様

二伸

増田様にも宜しくごほうせい祈りそうろう

封筒が無いこともあり出された年が確定できないが、全集の日記から関連記事を抜き出してみる。

大正3年3月1日 銚子測候所の驗潮器据付場所を見聞に行く、午前八時半の汽車にて十二時着、大村所長出迎えに来らる。直ちに測候所新築地に行き女夫鼻（めおとばな）の場所を見に行く、二時四十分の汽車にて帰る。

同年10月3日 大村銚子測候所長来校。驗潮器井戸修繕設計の件につき相談す、大体の方針を述べ詳細の設計は木工課の人に頼む事とす。

大正4年1月16日 午後銚子測候所技手来る、潮汐簡易予報の事話す

同年9月25日 出校 銚子の潮汐予報に関し調査す

同年12月27日 銚子大村氏より鮪一尾送り来る。

大正5年3月20日 銚子測候所の増田氏来り、潮候表発表の事につき相談あり。又第二次振動調査法を相談す。

銚子測候所は大正3年に移転しており、寅彦は驗潮器の据え付けなどについて相談を受けていた。大正3年3月1日も日曜日で且つ大学の記念日であり、非常に忙しいにも関わらず約束していたので義理堅く出かけて、あわただしく往復している。大正4年9月25日「銚子の潮汐予報に関し調査す」とあるのがこの潮汐のデータを受け取った頃であり12月24日に分析結果を大村所長に送ったと推定できる。12月27日にお礼の鮪を貰っているのは少し早いように思うが使いの者が持参してきたのかもしれない。大正5年3月20日には観測結果の発表に関しての相談にもものっているし、地方の研究者や技術者に本当に親身になって接していることがよくわかる。

この大村所長について、せめて名前でも分らないかと思っていたところ岡田武松「測候瑣談」に“蛸入道の悪戯”として出ていた。検潮儀に不思議な振動が記録されて、いくら考えても原因が分らないので寅彦に相談し井戸の中を改めたところ小蛸が入っていたとのエピソードであり、大村信之助所長となっていた。インターネットで検索してみると大正11年に天気予報がうまくいかずに海難事故が多発したことに心を痛めて投水自殺したことが書かれていた。

あと名前が出てくる平山博士とは平山信あるいは平山清次と思われる。ふたりとも天文学者で同じ頃に活躍していたのでどちらとも断定できなかった。

大谷亮吉は明治8年生まれ、兵庫県出身。大正6年「伊能忠敬」を刊行して科学者の伝記として高い評価をうけている。

書簡集や日記を読むと、寅彦が自分のネットワークを活用して地方在住者の研究結果を発表することに尽力している事例はたくさんあるが、この書簡にも配慮があふれている。しかし手紙とはいえ、あまりにも丁寧な言いまわし、と思うのは時代を知らない私だけだろうか。

## 追記

榦68号が発行されてから会員の山田功様から平山博士とは平山信と思われるとのご連絡をいただきました。

理由としては、手紙のはじめに、「測地学会へ・・・」と書かれているので測地学会に関係している平山博士と思われ、理化学辞典で調べてみると平山信は1926年（大正15年）測地学委員会委員長と書かれている。つまり、当時測地学会に関係がありそうな人は、平山信であろうと推測したとのこと。ありがとうございました。